

書 評

海老根宏・高橋和久編著

『一九世紀「英国」小説の展開』

(松柏社、2014)



宮丸 裕二

本書は、十九世紀の英国小説に関する論考がまとめられた論集であり、その20本にのぼる論考の寄稿者は、編者の海老根宏氏が東京大学大学院にて英国小説を講じた際の受講者たちと、氏の同僚にしてみても一人の編者でもある高橋和久氏と、それから海老根氏本人である。ここでいう「英国」は厳密にイギリスに限っているのではなくイギリスとその近隣の地域である英語文学圏を本論集は対象範囲としている。

本書の内容を一章ずつ紹介するのも本当は書評の役割の一つかも知れないが、実は本書の序文にて海老根氏が編者の立場から実に簡潔明瞭に各論の紹介をしてくれているばかりかこれが短い書評にまでなっているので、本書を手にとった方はそちらをまずは参照されたい。大変実用性に優れた序文である。この序文を見ればお分りの通り実に幅広く多くの対象やテーマを扱っている。海老根氏が説明するとおり、いずれの論考も小説「作品の『外部』へ向かう関心」を共有している。これはテキストの内的な精査や分析を疎かにしているという意味ではなく、テキストを必ず外側の何らかの文脈に置くことで読み方の可能性をそれぞれ提示しているという点で共通しているのである。

興味深いのは、海老根氏は二本の論考を寄稿しており、一本は最近書かれたものであるが、もう一本は40年前に書かれた『虚栄の市』に関する論文である。氏は序文の中で「ただ唯一の不安は、文学研究の方法も内容も、私の時代と比べてはるかに、あえて進歩とは言わないが、変化してしまったことである」と懸念を隠さないが、一方で、「これら十八編の論文に目を通した私は、当初恐れていたほど、私の論文と他の論文との不整合を気

にする必要はないように思い、少しばかりの安心感を覚えた」とも言う。実際、多くの論考はここ数十年の学界の研究の成果を踏まえて書かれていて、その間にまた追加的に投じられた新理論や新たに注目されることである種の研究ジャンルを形成したようなものもあるが、しかしそれぞれの論考を見る限りそうした理論が論文の軸としてそのまま利用されることもなければ、新興の研究ジャンルであることを謳ってそのまま当てはめる例というものは見られず、ここ数十年の成果が利用されるとしてもそれが研究に際しての問題意識として論考の中に沈殿しているのを見るに留まる。そうした問題意識があるというのであればここ数十年で名前がつけられるその以前から既に研究の中には存在していたことも少なくないのである。あるいは、昨今の多くの研究が依拠する前提的知識として共有する古典的研究というものも、もう随分前にリストとして並んだものから長らく変化していないとも言えるかも知れない。そうしてみると、今も昔も数十年程度では批評において作品に投げかける視点というものはあまり変わっていないのかも知れない。研究を取り巻く状況は変わったし、大学にポストを維持しつつ研究成果を発表しないでいられる人も減ってきたことは歴然としていても、実は研究そのもののあり方だけを見るならば、数十年の時代の経過はゆに飛び越えられる研究分野だということも、海老根氏の過去の論考の掲載が教えてくれる。私の見るところでは、変わっているのは文体であり、研究の成果の書き方、見せ方であって、その関心はほとんど不変なのである。

そして、本書が刊行されることで新たに示されるのは英文学研究あるいは英文化研究の「これまでの教育の成果」と「これからの教育の可能性」の二つである。「教育の成果」とは、すなわち、伝統ある東京大学の英文科の大学院の研究室がこれだけの数の有能な研究者を比較的近い過去にも輩出してきたことが改めてよく分かる書物だということである。研究書の出版を目指して特別に研究会などを開催してきたという種類の書籍ではないし、同じ研究科に在籍していても執筆者全員が時期を同じくして同席していたというわけではないのだが、長い時間を通じてその教室で各世代の学生が海老根氏の元で論を開陳し、意見を交換し、互いに切磋琢磨してきたその様子がその教室に一度も足を踏み入れたことのない私にも本書か

ら伝わってくるのである。本書を手にして、私の念頭に自然と浮かんできたのは、『イギリス／小説／批評—青木雄造先生追悼論集』（小池滋・高松雄一・野島秀勝・前川祐一編）である。これは、『青木雄造著作集』（小池滋編）と姉妹本のようなかたちで、共に1986年に南雲堂より刊行された論文集である。英文学者青木雄造氏の元でかつて学んだ者たちが論考を寄せた作品である。当時既に有名な研究者（実は英文学者を名乗る者ばかりではない）となっていた錚々たる執筆陣が集まり、常日頃出版している普及版の書籍で見せるよりは随分と学術的な内容および口調で、久しぶりに固い内容をそれぞれに扱うという興味深い一冊であった。かつての同窓が集って各々の研究歴や執筆歴の開始点に戻り、改めて本来のテーマに取りかかって見せ、かつての教室の様子を伝えると共に、教室にいた頃の研究への取り組み方を教室の外にいる読者にも見せてくれた。この書と比べると、30年近くを経て出版された本書は同じ趣旨で編まれたのかどうかは確言できないが、少なくとも同じ効果を持つと言えるのではないだろうか。

実際、本書を読んでいると、章を横断しての連鎖を感じることは頻繁で、それは一つの教室から元々発しているからではないだろうか。例えば、第一章高橋和久氏の論考にあるロンドン側にいる人間から見たスコットランドの映り方というウェイバリー的な問題設定は、第三章の高桑晴子氏の論考においてそれが違う小説を題材にしながら問題として共有されている。そして、その第三章でスコットランドが既に抱える固定的なイメージの中でどのように英語を発信したのかというネイションの物語にまつわる問題は、遡る第二章の吉野由利氏の論考においてアイルランドに場を移して同じ問題意識を共有した論として展開される。これらはほんの一例に過ぎず、本書のいろいろなところで同じ関心が別のところと連鎖しており、蜘蛛の巣が張り巡らされるようにして、各章同士が幾重もの呼応関係にあるのである。それぞれの扱うテーマも方法もばらばらでありながらも本書の中で互に通じ合っている様子は、在籍した時代も専門も論じ方もばらばらであった学生がそれでも同じ教室で切磋琢磨していた様子を伝えるのである。とはいえ、それでも本書のあとがきによれば東京大学の英文科というところはどうも先生を孤独へと追い込む職場であるらしいのだ

が。いずれにしても、英文科や文学科や文学部の斜陽ばかりが言われる昨今であるが、前掲『イギリス／小説／批評』を机上において本書と照らし合わせるとき、青木雄造氏のときよりももっと幅広くもっと多様になり、なによりこの分野を専門とする研究者の裾野も広がっていることは明らかなのである（専門家を裾野とは言わないかも知れないが、要は市井でのこの分野の関心の深まりと同じくこのことは重要なのである）。

いま一つの点として挙げておいた「これからの教育の可能性」についてであるが、本書が企画されるに際して、高橋和久氏の中に「学生が読んで卒論執筆の助けになり、同時に学術的にも意味のある英国小説論集を」という目標があったようなのだが、それを一方では「学生向きでありながら、学術的にも意味を持つ論文という自己矛盾」と呼んでみたりもしている。しかし、そうであろうか。文学研究というものには常々教育方法上の課題がつきまとっていて、これは既にして文学研究に宿命的なメタなトピックの一つである。文学にまつわるどんな知識を知って、何を実演できたら「教え、教わったことにするか」という、成績評価も含めての、教育という体制に仕上げねばならないという問題があり、いや、そもそも個人個人が生まれ持ったセンスに依存するのだから何を教えても無駄なのだという議論や、「読む」という行為は元々教育不可能な営みだという見方もあるだろう。確かに、英文学を学ぶことに関連しては、伝統的にある翻訳作業を通じて英文読解内容の確認をしていくことも基礎を形成する重要な方法の一つであろうし、従来の文学史の中で作家・作品とその意義を一つひとつおさえることも必要な知識かも知れないし、文学分野で批評理論として応用される思想をアンソロジー的にまとめた教科書で一つずつ理解することも助けになるかも知れない。しかし、その手の教科書が自分の試論を作る上で有効であった試しはやはりないのである。私の経験したところで言うと、文学批評こそは先行する研究成果の実例に触れることでしか、本質的には学ぶことはできないものなのではないだろうか。上に挙げるような基礎や補助的な知識は教科書にして書かれ得るし、パッケージとしてまとまった知識として学び得るとは思うが、こと作品の批評の方法について、あるいはどういうことが批評になっているのか、どういう批評が意義を持ち得るのかということについては、ついで一冊一冊の研究書、一つひとつ

の論文、あるいは一つひとつの口頭発表を聞くことでしか学んでくるということはなかった。その中には無理矢理に設定されたテーマだって随分あったが、無理にテーマを設定して論ずることだって無意味ではなくて、数々の試論の一つを形成するならば所詮は説得力を持ちうる試論かそうでない試論であるかという分類を経てからそれもまた論じ方のパターンのストックにおさまっていく。そうして集めた数々の批評の方法論を、物真似も含めて今度は教室で試してあれこれと指摘をもらう。演習だけが可能であり、根本的に講義ということが不可能な分野。そしてその演習は壇上で発表されても印刷されてもどこかで教室の演習の延長であり続ける。文学部以外のところで働いていると、他分野を専門とする研究者の方から「文学が一冊で分かる教科書でお薦めはありませんか」と訊かれることが多いのだが、勿体ぶって思われるのを回避したい気持ちで一杯でありながら、しかしこれ一冊で文学研究のなんたるかが分かるというものを挙げるができない。逆に他の分野にはそういう一冊があるのだとしたら、学問としての性質がやはり大きく異なっているのだろう。文学研究は研究の実例を知り続ける、その積み重ねの中でしか学ぶことができないのだと思う。

こうした方法でしか、自分たちがその分野で何をする事になっているのかを学び得ないのが文学批評の特徴であるとき、「学生向きでありながら、学術的にも意味を持つ論文」というのは自己矛盾であるどころか、その逆である。学術的に意味を持つ論文のみが学生向きの格好の教科書になるのである。高橋和久氏は本書を編むにあたって「啓蒙性を捨てた」とも言うが、むしろこうした学術的な論文集をくまなく読ませることをもってしか学生の卒論指導などできないのではないかと思ひ至るのである。こうした、一つひとつの論考がある程度の質的な高水準を維持しつつ、かつ広い範囲の題材が扱われつつ、採られる方法も多様であり、それでいて各章の論を一般化したり他への応用する欲望を鼓舞するようなもので溢れているような論文集こそが、英文学を学ぶ学生に対して意義ある研究がどのようなもので、現在の研究の最先端がどんなものかを示すと共に、自らの独自のテーマをやがて見つける方向へ向かわせる最適な教材になるだろうと考える次第である。

研究を取り巻く環境が転変する今日にあって、場合によっては英文学を

同窓と共に学ぶ機会が減るところもある中で、これまでの教室という場に代えて、学会や書籍が教育の役割を引き継いでいかねばならないところも大きいだろう。そうした中で本書のような図書が一冊でも世に出ることが、それ自体の業績としての成果に加え、教育に貢献するところが大きいだろうと考えるのである。

——中央大学教授